特集

佐賀市の未来にワクワク!!

佐賀市政はすごく面白い!! 秀島敏行佐賀市長へのインタビューや、市役所が取り組むだけでなく、各事業への率直な感想だ。リアルタイムの課題に取り組むだけでなく、10年、20年先の将来像を見据えて、地道に準備する。それが今回の取材先に共通する考え方だった。じっくり育てれば、それだけ実るものも大きい。佐賀市にはワクワクする未来が待っている!!

佐賀市の未来像は―。10月に行われた佐賀市長選で激戦を制し3選を果たした秀島敏行佐賀市長にインタビューした。趣味から、重点的に取り組む課題まで、ざっくばらんに語ってもらった。

Q 最初に秀島市長の人となりを。趣味や最近読んだ本などを教えてほしい。

趣味はスポーツ。ずっとバドミントンをやってきたが、市長になってここ7、8年は出来ていない。魚釣りも好き。夫婦一緒に友人の船に乗せてもらう。以前は年4、5回行っていたが、今は年1回くらいだ。釣れた魚は鱗や内臓をとったり下処理くらいはする。小さい頃は地元の本庄にあるレンコン堀でうなぎを掛け針で釣って自分でさばき、七輪で火を起こし蒲焼にして食べていた。

最近読んだ本は藻谷浩介さんの「里山資本主義」。友人に薦められて読んだ。里山にある山野草や薪、間伐材などの資源を大事にしていくべきじゃないか、との内容。そういう生活に戻ったらリラックスした人生が過ごせると提案されている。東日本大震災にともなう原発事故以降、再生可能エネルギーが注目を集めている。この本の中でも間伐材を使った発電が紹介されている。それと近いことを佐賀市も「バイオマス産業都市」構想として取り組んでいる。朝は原則

プロフィール
ひでしま・としゆき　1942年佐賀市本庄町生まれ。熊本大学法学部卒業後、佐賀市役所に入庁。消防長、水道局長、佐賀広域シルバー人材センター事務局長などを歴任。2005年に佐賀市長選に初当選。現在３期目。

基本は「普通の 生活」

としてバスで通勤している。その中の15～20分が本を読んだり、資料に目を通す貴重な時間になっている。

Q 選挙戦を終えての印象は？

人の輪の広がりを感じた。友人の友人が自分の友人に、と友達の輪が広がっていく。久しぶりに再会する人がいたり、不思議な出会いがあったり。選挙中、ある集落で行った集会で、女性がお父さんの遺影を持って「父も応援しています」と声を掛けてくださった。実はそのお父さんは人生の先輩と尊敬する方だった。候補者冥利につきる、というか、一番感動した出来事だった。

逆に、これまでの市政に対し「何もしていない」、「スピード感がない」、「佐賀に活力を感じない」という声も聞いた。しかし、毎日、お祭り騒ぎをする必要はないと思うし、それより「普段の生活」が充実することこそ重要だと考えている。ＰＲ下手、口べただとも言われるが、流暢に話す方が良いとは限らない。「若さが足りない」とも言われたが、私は気持ちも体も若さを保っていると思っている。

Q これまでの2期8年間で「気づいたこと」と3期目で重点的に取り組む課題は？

まず福祉の問題として、障がい者の自立支援への手助けが十分ではないと考えている。「障がい者」といっても、精神、身体、知的と違いがあるし、個人によって症状も異なる。大枠の対応はしているが、細かい部分はまだ手が届いていない。これまでの施策では、障がい者個人をどうサポートするかに重点を置いていたが、障がい者が暮らす家庭の実情等も配慮する必要があると考えている。一緒に暮らす親族の置かれている状況などを把握しながら、障がい者の支援をしなくてはいけない。「家単位」で考える必要がある。また、発達障害の問題についても、もっと積極的に対応したい。子どもだけでなく学校を卒業した人たちで家庭に引きこもっている人も含め、外へ出ることができるように専門のＮＰＯと一緒に取り組んでいく。

合併10年を境に、財政面での特例措置が縮小されていく。そのため支所のスリム化が課題になる。一方で先日のフィリピンに大きな被害をもたらした超巨大台風のような、これまでの常識では想像できなかった自然災害にも備えなくてはいけない。災害対策に対応するためには支所の維持は必要。スリム化と防災拠点の充実という一見矛盾した課題にバランスよく対応しなくてはいけない。

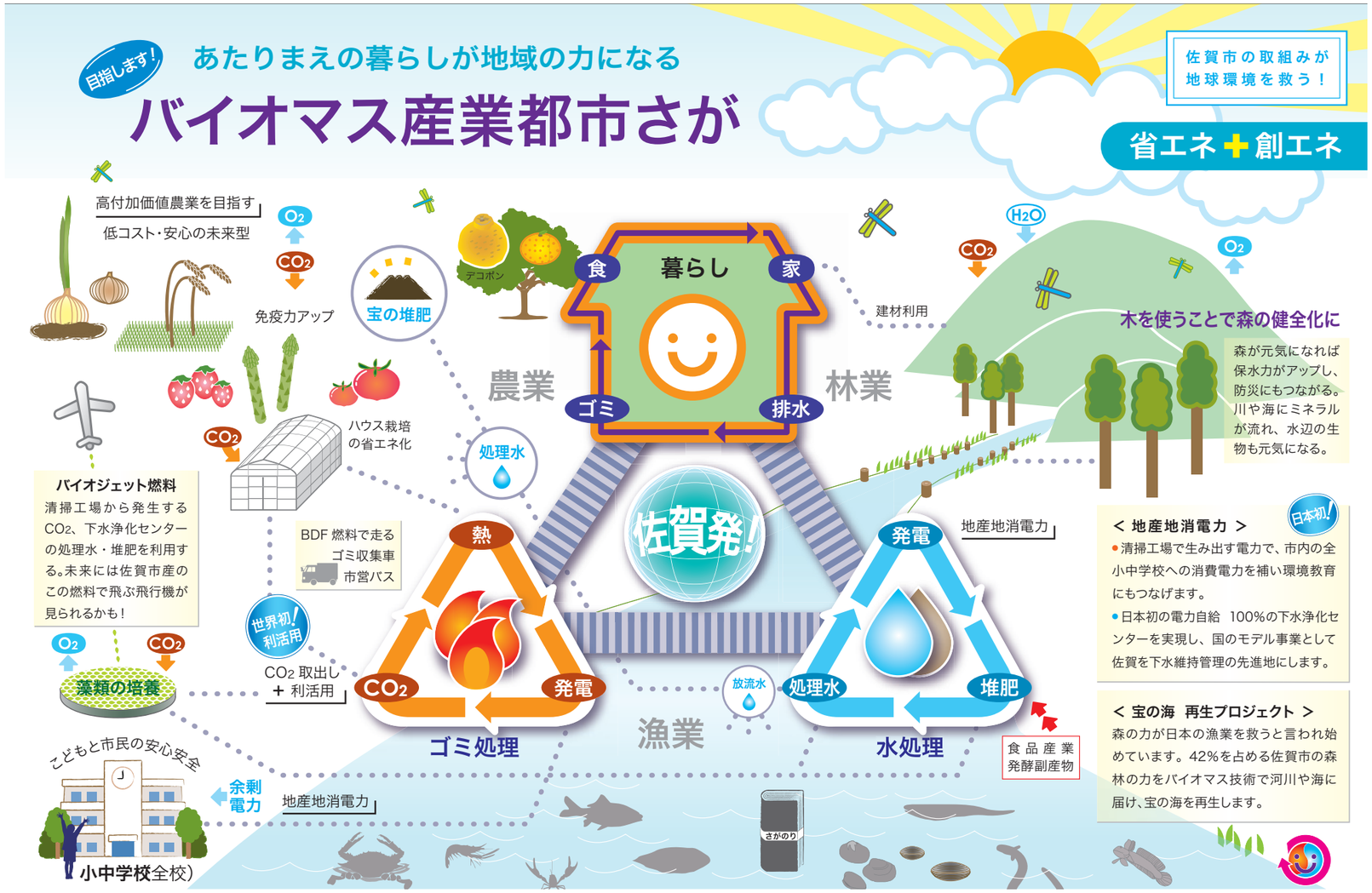
公共下水道とゴミ。人から嫌われる施設を「宝」を生むものに変えていく取り組みについてはこれまでもトップ集団を走ってきたという自負がある。さらにもうひとつ抜け出すために取り組むのが「バイオマス産業都市」構想だ。今年10月には清掃工場の焼却炉からＣＯ２を取り出す装置を設置した。これで生じたＣＯ２をミドリムシに与えることによって、ゆくゆくはジェット燃料を生産しようという計画だ。佐賀は日照条件などミドリムシの培養に適している。これをぜひものにしたい。

雇用も大きな問題だ。若い人を引き止めるだけの仕事が不足している。勤労の機会を増やし佐賀で生活できるようにする。そのためには工業団地を推進したい。先ほどの「バイオマス産業都市」構想と連動して、民間が処理に困る廃棄物を資源として活用するなど、佐賀市独自の支援を行うことで、地場産業を育成しながら、今ある大手の企業もつなぎ止めていく。

Q 最後に秀島市長が考える、佐賀市や佐賀市民の未来像は？

基本は「普通の生活」だ。まずは健康で家庭生活がきちんと出来て、家庭内も楽しく、和気あいあいと笑顔が絶えない。そういう市民の幸福感を向上させるような行政をすべきだと思う。そのために、健康、雇用、生活環境の整備に軸足を置きながら、「夢」という部分で、熱気球世界選手権やラムサール条約登録、三重津海軍所跡の世界遺産登録などに取り組んでいきたい。

すぐに手を打たなければいけない課題もあれば、先を見据えて取り組まないといけない問題もある。特に子育てや健康、教育は将来のことを考え早めに対応しておかないと間に合わない。目先のことだけではなく、将来的な展望が大事だ。子どもや孫の世代に佐賀市がどうあるべきか。それを基軸につなぎ、積み上げていかなくてはいけない。



佐賀市産のジェット燃料も

「バイオマス産業都市」構想

2020年の東京オリンピックへ、佐賀市内で作ったジェット燃料を使った飛行機で応援に行こう!! 佐賀市は今、そんな「夢」に取り組んでいる。市内で石油を採掘しようという訳でない。主役は「二酸化炭素分離回収装置」と「ミドリムシ」。わくわくする夢でいっぱいの「バイオマス産業都市さが」構想を取材した。

「バイオマス産業都市さが」とは、暮らしの中にある資源を活用して地域産業を活性化する構想。佐賀市ではこれまでも市清掃工場や下水浄化センターで、ごみ発電やプールへの余熱利用、ごみ回収車の燃料提供やノリ漁家への栄養塩の供給、汚泥の堆肥化などに取り組んできた。これまでも積極的に環境資源を活用していたが、佐賀市はさらなる未来へと大きな一手を打った。

"世界初"二酸化炭素分離回収装置

それが市清掃工場に設置した二酸化炭素分離回収装置。同装置は10月に稼働。清掃工場の排気ガスを対象とした同種装置は他に例がなく、"世界初"の試み。排気ガスの中から日量20キロの二酸化炭素を回収する予定だ。

二酸化炭素は植物の成長を促進させる働きを持つ。回収した二酸化炭素はハウス栽培など農業での活用が見込まれる。また炭酸水の原料にもなるので"さがソーダ"を使った「さがハイボール」も夢じゃない。溶接や触媒としても利用できる。さらにこの"資源"の活用策の大きな柱として考えているのが「ミドリムシ」の燃料化だ。

ミドリムシを燃料に

ムシというのに虫じゃない―。「ミドリムシ」は自発的に動く動物的性質と光合成を行う植物的性質を持つ不思議な生き物だ。たくさんの栄養素を含み、細胞内に脂質を多く含む。この生物の特性に着目し大量培養に成功したのがバイオベンチャー企業「ユーグレナ」だ。同社では培養したミドリムシを利用した健康食品を提供するほか、バイオ燃料としての活用に取り組んでいる。

「ミドリムシ」がなぜ燃料になるのか。ミドリムシは動ける植物。光を効率的に吸収して光合成を行うため成長が速い。また細胞内に油脂を多く含む。そのためミドリムシから抽出・精製すると良質なオイルができる。このオイルはジェット燃料に適した性質を持っているという。またその絞りかすは飼料や肥料として活用できるという。

培養に適した佐賀市

その栽培に必要なのが日光と水と二酸化炭素。そう、佐賀市の新装置はミドリムシの"エサ"としての活用が期待されているのだ。さらに佐賀は日照条件が他都市よりも恵まれている。佐賀市はユーグレナ社と共同開発の妥当性を検討するために「秘密保持契約」を締結。市バイオマスエネルギー戦略室は、今後2年間をかけて清掃工場から回収した二酸化炭素の安全性や、コストなどを検証。その結果を踏まえて本格的な分離回収プラントを作り稼働させる予定だ。佐賀市ではユーグレナ社を始め、二酸化炭素を必要とする企業の誘致につなげたいとしている。

ゴミで豊かに暮らす

「バイオマス産業都市さが」構想はそれだけではない。下水浄化センターでは、食品産業の発酵副産物を活用して堆肥を作り、有料で販売している。汚泥を処理する際に発生するメタンガスからは水素を取り出し、水素自動車の燃料とする構想もある。また間伐材や、製材後に出る樹皮や木くずを引き受け、発電に利用する計画だ。森林に手が入ることで、森の保水力を高め防災にもつながる。また健康な森は川や海にミネラルを運び、漁業などを支える。

「循環」を意識することで、これまでゴミとされていたものをうまく活用し、工業、農業、漁業といった佐賀市の新たな産業力につなげる。壮大だが暮らしに密着した「始末の良い」計画は、まさに「今の技術を使った江戸のまちづくり」だ。

二酸化炭素回収装置

健康づくり課

地区担当保健師が健康管理!!

地域の実情に合わせた健康づくりを!!　佐賀市健康づくり課では、本年度から生活習慣病を担当する保健師に「地区担当保健師制」を導入した。保健師を市内36校区に分け、健康管理を担当することで、よりきめ細かい生活習慣病対策を実施する。

半分は「生活習慣病」

佐賀市総医療費の半分は「生活習慣病」―。佐賀市の平成24年度5月分の国保総医療費（5月診療分）は約13億6千万円。そのうち生活習慣病に関係する医療費は約6億2千3百万円を占める。この病気は文字通り、食生活を改善したり、運動をすることなどで病状を回復する改善傾向に導くことができる。これまで、佐賀市では国保加入者を対象にした「特定健診」の中で、生活習慣の改善が必要とされた人には、保健師・管理栄養士が家庭訪問をするなどサポートしてきた。しかし「特定健診」の受診率は平成24年度は24％で県内最下位。また、繰り返し健診を受ける「リーピーター数」も低かった。

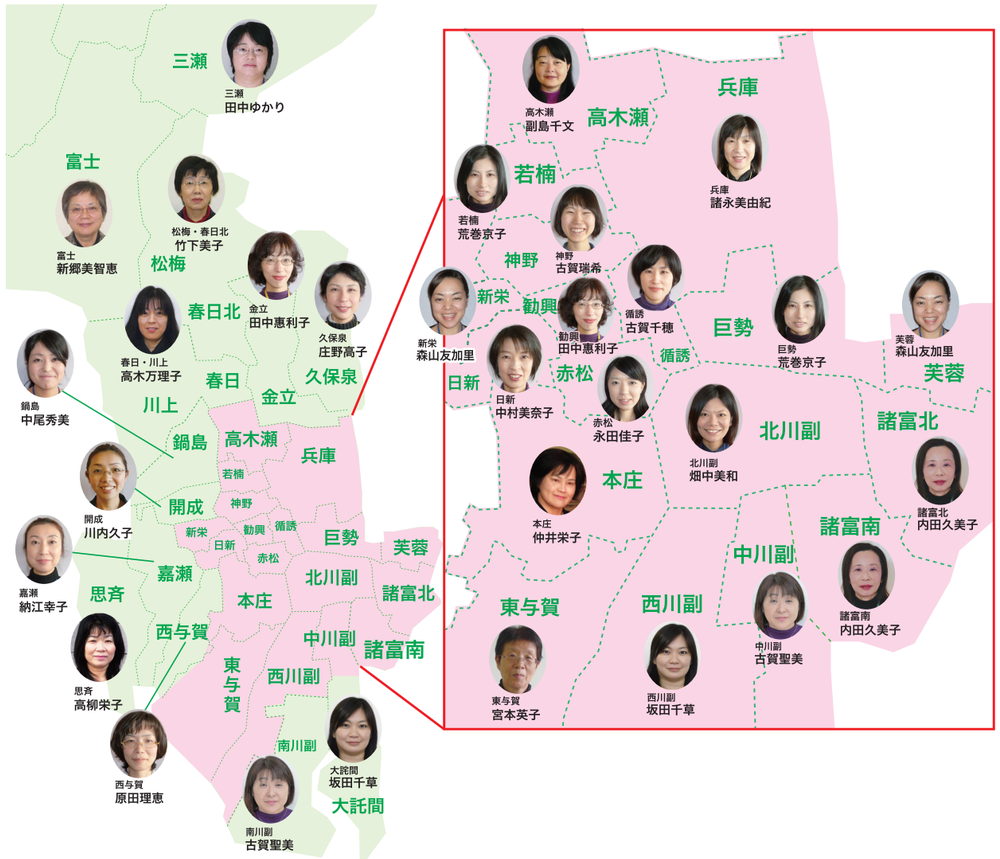
実情を分析したところ、佐賀市と新たに合併し支所は、旧佐賀市よりも特定健診受診率やリピーター数の数値が良いことが判明した。地域に根差したネットワークによる呼び掛けや、顔がみえる関係が大切という事で佐賀市全域に「地区担当保健師制」を導入することになった　これまで旧佐賀市では健診を担当する保健師を南北2ブロックに分け、指導が必要な人がほぼ同数になるように担当分けしていた。「地区担当保健師制」では、36校区にそれぞれ保健師を配置。その地区の特定健診の呼びかけから、家庭訪問、生活改善まで行う。平成24年度の特定健診を受けた人のうち、指導が必要だったのは1958人。新しい制度にあてはまると一人あたり50～100人を担当することになる。

地域の傾向を把握

新制度は4月からスタート。保健師からは「家庭訪問の移動距離が少なくて済む」、「地元の自治会長さんたちが、健診の呼びかけを手伝ってくれて助かる」などの声が出ている。また、決まった地区を担当することで、その場所の食生活や仕事の傾向を理解し、より精度の高いサポートが可能になる。

担当の保健師は新人からベテランまでさまざま。担当者の能力によって、地区ごとにサービスの差が出るのでは、との懸念もある。その対策として、昨年から月2回、担当保健師が集まり、事例研修を行っている。細かいノウハウを共有することにより全体のレベルアップが図られている。

11月末からは各校区の公民館で出張健診を行う（詳しくは次のページに）。これも地域との連携のひとつだ。「顔の見える保健師」を軸に「特定健診」の受診率とリピーターアップを目指す。



産業振興課 流通促進係

知恵で市産品売り込む!!

市産品で"外貨"を稼げ―。人口減が予想される中、パイの取り合いではなく、外へ市産品を売り込み、利益を地元に呼び込む。佐賀市には良いものを実直に作るが、営業と企画まで手が回らない小さな企業が多い。そこでその足りない部分を手伝うことを目的に5年前に出来たのが市産業振興課流通促進係だ。

費用掛けず小回り良く

同係の活動は「人をつなぐ」「場を提供する」「メディアを活用する」の三本柱だ。「人をつなぐ」とは佐賀市内の業者に、デパートのバイヤーなどを紹介する試みのこと。「場を提供する」は商談会を主催したり、各地の物産展に参加するなど市産品をＰＲする機会を作ること。「メディア活用」は佐賀市や市産品が話題になるような切り口を考え、メディアが取り上げやすい形で発信すること。費用をかけず小回り良く動いている。

狙っているマーケットは、県内から海外まで佐賀市以外のどこでも。良いものにはお金を使う人に届くような売り場に置いてもらい、「適価」で売ることが目標だ。

"間借り"作戦

昨年は都内百貨店の催事・大九州展で「佐賀特集」を開催。食品、工芸など10店舗が出店した。2月6日の「ノリ」の日には秀島敏行佐賀市長がトップセールス。デパート近くの小学校でノリの授業をしたり、熱気球教室を開くなど、ニュース性のあるイベントを企画した。デパート関係者によると、昨年行われた同店の催事のうち、売り上げ伸び率ナンバーワンになったという。

次に課題になったのが、市産品が常に買える拠点づくり。しかし佐賀市にはアンテナショップを運営するだけの体力はない。そこで考えたのが"間借り"作戦。約1年半前、佐賀市の企業「竹八」東京・阿佐ヶ谷店の一角に、市産品を置くコーナーを用意してもらった。アイテムは提案の中から同社が選び判断する。当初は20～30アイテムだったが現在は100アイテム以上に。同社の露出も増え、相乗効果が生まれているという。佐賀市は家賃や人件費を払わず、市産品をいつも売っている場所を確保した。まさに一石二鳥だ。現在、"間借り"作戦は3件で展開、今後もアメーバ状に増やしていきたいという。

さらに11月には首都圏にあるアンテナショップの人気商品を集めたコンテストで、佐賀市の「コガヤ」の「旨唐（うまから）佐賀牛」が1位に輝いた。昨年は馬郡蒲鉾のミンチ天が最高賞を受賞。2年連続での栄冠となった。今大会は「ごはんのおとも」をテーマに全国から21品が出品。東京都内の会場で試食した約9百人が投票し選んだ。同係はこれまでの物販会場での経験などを活かしサポート、2連覇に貢献した。

昨年4月には川副特産「光樹とまと」づくしのメニューを東京のイタリアンレストランで味わうプロモーションイベントを開催。参加した辻口博啓氏ら有名シェフや業界誌記者などからは「うま味が強い」、「甘味と酸味のバランスが良い」など非常に高い評価をもらった。一般客向けには、東京のレストランで1カ月間、「佐賀フェア」を実施。佐賀市の食材を使ったメニューを提供してもらった。

逆に佐賀市に流通関係者などを呼ぶ商談会も開催。11月には都市圏の百貨店仕入れ担当者や高級料理店料理長や通販担当者など約15人を招き、「地場産品・製品等アドバイス会」を開く。地場産品の改良や、全国展開に向けた相談やネットワークづくりの場として期待される。

台湾、ＮＹでも

海外にも目を向けている。10月初めには佐賀市の6社による台湾商談ツアーを実施。現地の百貨店や高級スーパー、レストランチェーンなど7カ所を回った。また同月中旬にはニューヨークの一流レストランを使った食のイベントに佐賀市内の5社が出店。ＮＹの有名シェフやバイヤー、フードビジネスの関係者らに市産品を売り込んだ。

50年、100年先の地域を見据えた経済活性化のためには、小さな企業の体力を付けることが重要。同係は総合調整役として佐賀市内の質の良い商品を作り続ける企業を外へ売り込む。

ＮＹ食品見本市

佐賀市物産販売協力店開店応援

光樹トマトプロモーション

商品アドバイス会

百貨店佐賀フェアトップセールス

料理人生産現場案内